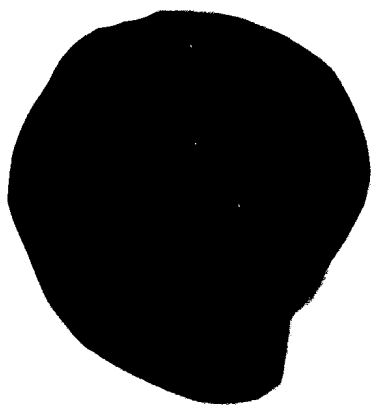


いなる日

阿部昭



講談社

阿部昭（あべ・あきら）

昭和9年広島市に生まれる。東京大学フランス文学科卒業。昭和37年処女作「子供部屋」を発表、昭和44年小説集「未成年」を出版。

大いなる日

昭和四五年一月二〇日 第一刷発行

昭和四五年九月二〇日 第二刷発行

著者 阿部昭

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二二

郵便番号／一一二

電話／東京(94)一一二二(大代表)

振替／東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 有限会社文信社

定価 六二〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えます。
©Akira Abe 1970. Printed in Japan

目次

大いなる日	5
鶴沼西海岸	39
おふくろ	67
孫むすめ	119
子供のために	153
十年	181
後記	215

装帧
驹井哲郎

大いなる日

阿部昭作品集

大
い
な
る
日

1

さよならだ。永かったつきあいも、これでさよならだ。僕はいちばん古い友達をなくした。……

みんなでおやじの病室の後始末をしてから、僕はまだ何か忘れものはないかと一人で見てまわり、最後に荷物の残りと自分の靴をぶらさげてゆっくり階下へ降りて行った。

僕はさいしょ、何の気なしに正面の玄関のほうへ歩き出した。すると、誰かが暗い廊下のむこうで僕を呼んだので、思い違いをしていたことに気がついた。おやじを連れてきた時は堂々と表から入ったのだが、帰る時は裏口からなのだということに。その建物の一方の隅に、死者が運び出される専用口があったのである。

裏門のコンクリートの空地に、鼠色の寝台自動車が停まっていて、車の屋根に西日がさしていた。人夫が二人、担架にのったおやじのからだを尻のドアから、ほうりこもうとしてい

るところだった。

上にかける夏蒲団がみじかいので、長身だったおやじの足首が、突き出ているのが見えた。二つの足首は、生者の場合にはあり得ないと思われる具合に、すなわち、左右の足の甲が思い思いのちぐはぐな角度にねじれて、まったく力なく傾いていた。

それを見て僕は、もう一度、たしかにおやじは死んでしまったのだ、と思った。

ドアが閉まり、寝台自動車はおふくろだけを便乗させて、走り出した。僕らはとめてあったタクシーでそれを追った。僕らが出たすぐあとで、一人の看護婦が、門の鉄の扉を閉めているのが見えた。

努力にうらみなかりしか？

みちみち僕が考えたことは、あれでも帝国海軍のはしくれだったおやじの口調をかりていえば、つまりそういうことだった。あんな死なせ方は、おやじに対して水くさくはなかったろうか、と。

おやじは、とうとう自分の病名を知らずじまいだった。すくなくとも、僕やおふくろには、最後までそう見えた。それを僕らは、うまく行った、などと手柄顔に吹聴し合っていたのである。それからまた僕もおふくろも、おやじが、こうしてくれ、ああしてくれるな、というほぼその通りにしてやったのだ。そうか、そうか、という物分りのいい顔を僕もおふく

ろもしていたのだ。どっちにしても、それは同じだったから。

そういうことが、ほんとうはいちばん水くさいことではなかったか、といま僕はひそかにあやしむ。

——お父さん、あんたは癌がんだそうだ。だから、早く入院して切ってもらおう。……と、僕はいわなかったのである。

七十いくつというおやじの年齢と体力では、どこへ持って行ったって切るのは不可能だろう、という医者意見に、僕らはむしろ胸をなでおろした。

昔おなじ海軍だったというただそれだけの理由で、おやじは近所の元軍医をおかしなくらいひいきにしていた。この医者に節を立て通して、子供みたいにいいなりになっていた。ところがこの男は、僕にいわせれば、ヤブ医者というよりは、ただの人非人だった。心臓病とのもっともらしいお見立てで、半年もたらたらと通院させたあげく、どうやら癌らしいから、よそへ持って行ってくれ、といいだした。

そこで僕は、近所のもう一人の人非人のところへ相談に行った。これは最近開業した若い大学出で、お得意をふやすためにラーメン屋みたいに気やすく往診を引きうけるという評判だった。この先生はすこぶる愛想よく僕を迎えてくれたが、ガンと聞いただけでたちまち葬儀屋のような口ぶりになった。「予算は？」と、しきりにたずねるのだ。つまり、この病

気の患者を死なせるについては、めっぼう金がかかる。だが小生は、引き上げた以上は、あらゆる種類の新薬をぶちこんで、ベストをつくすつもりだ、というのである。金づるをみつけたら最後、しがみついて放さないという風情だ。

勿論、僕はこの医者には蹴ったが、それはおやじのために金を出し惜しみしたからではない。惜しむほどの金を、僕らは持つていなかった。それよりも、おやじが、どうしてもあの元軍医に義理を欠きたくない、といいはるからである。

だが軍医さんのほうでは、ちゃんと先手を打っていた。おふくろをこっそり呼びつけて、「御主人はもう歩くのもやつとのようなだから、明日からは来んでよろしい。その代り、気休めに飲み薬だけはあげるから、一刻も早くどこか大きな病院へ入れてしまいなさい。この病気は、いまに土壇場になると、とても家に置いておけなくなるから。」

などと、しきりにいいふくめていた。

それならば、その大きな病院とやらを紹介してくれ、と僕はいいに行つた。

すると、先方は面子のこともあるのか、僕から顔をそむけるようにして、

「いまどきは、どこの病院だって、こういう手おくれの患者は強制的に退院させるくらいだから、いまからでは引きとり手はないだろう。困つたものだ。」
という。

では、往診に切り換えて、最後まで見てやってくれ、とたのむと、

「こういうケースは、とかくあとで家族に恨まれるのが分っているから、ごめんこうむる。」
という。

完璧だ。おまけに、そいつは僕と話しているうちに、奇妙に昂奮してきて、ぶるぶると手をふるわせていた。

——見ろ、海軍、海軍って、こういう屑もいる。

おやじが神様みたいに思っている相手でなかったら、僕はこの卑怯者の頭を、そいつのすぐ鼻先にかかっている「神奈川県指定癌相談医」という看板でぶち割ってやったかもしれない。

僕はいまでも、あの時の自分がよくそれをこらえたと思って、満足している。僕は考えた——このまま相手のいいなりになって家へ帰れば、おやじは、病状が少しも好転しないどころか悪化する一方なのに、なぜ明日から通院しないでいいのか、と怪しむだろう。それにまた、なぜ往診もことわられるのか、と。いまは、いやでもこの男の力を借りなければならぬ。

僕はもうどう思われてもいいという気持になり、「先生は名医だから」などとほとんど太鼓もちみたいな口さえきいて、どうか往診の恰好だけでもしてやってくれ、そのあいだによ

その病院を探すから、とたのみこんだ。「名医」はしばらく女みたいにくよくよと思案していたが、では週一べんなら行ってやらないこともない。ただし小生がもはやこれまでと見切りをつけたら、即日よそへ持つて行くこと、と条件をつけた。そして、じきに死ぬと分っている病人に時間をさくくらいなら、もつともつと大事な患者が沢山いる、とうさんくさいヒューマニズムを説く始末だ。

この時から僕とおふくろの辛い仕事が始まった。——おやじをだますこと。貴様らは、ぐるになって、俺の病名をひた隠しにする。そういつているようなおやじのせつない視線との、いつ終るともない、長いにらめっこがはじまった。

おやじは、毎週木曜日の午後の、わずか五分足らずの往診を、何日も前から心待ちにして、生きていた。「名医」は立派な外車でのりつけてきた。看護婦をしたがえてものものしく入ってきて、栄養剤の注射を一本そそくさと打つと、いつもおそろしく不貞くされた顔つきで帰って行った。こんな金にもならん仕事で世話をやかせやがる、という感じだった。だが、おやじは、大して迷惑はかけなかった。たちまち、往診打ち切りの宣告が下されて、お医者ごっこは終わったから。

おやじの死に場所を探してくれたのは、けつきよく、兵学校同期の老人たちだった。隣りの町の場末の、小さな病院で、その老院長もこれまた昔の海軍の軍医であり、おやじはそ

ういう病院ならばというので入院を承服して、そこで死んだ。もっとも、おやじはそこで二週間しか生きていなかった。死の期日だけは例の「名医」の見立てが的中したので、僕は僕らいたいそうおどろいた。

おやじに水くさくはなかったか、と僕が一途に考えこんだのには、そのこともあった。あんな田舎のみすぼらしい病院でではなくて、東京の聖ロカダの慶応だのいう、大きな、きれいな病院で死なせてやるべきではなかったか。……どこへ持って行ったって結果は同じだったのだということも、おやじが衰弱のために大して苦しみもせずに死んだことも、僕のなぐさめにはならなかった。

それを何といえはいいだろう。僕は、あの敗戦の年におやじと暮らすようになって以来、いくどかおやじと友情をむすぼうとして、失敗していた。あるとき、それは成功したかに見えたこともあった。だが全体を通じてみれば、僕はおやじの大きさにおよびなかった。おやじの相手として自分に不足するところがあるのを、いつも僕は知っていたように思う。そしていま、僕は、おやじとの友情の機会が永久に去ったことを感じていた。

病院からの帰りみちは、ひどい風だった。おやじを横たえた寝台自動車は、白ちゃけた田舎道を、もうもうと砂塵をあげて走っていた。僕らの車は、ひっきりなしにその土けむりの中をくぐって行かなければならなかった。このおなじ道を、ついきのうまで、僕は八月の炎

天の下を、おやじのおしめをかかえて病院へ通ったのであった。おやじはもう朦朧もうちろうとして、僕の顔も判らないようだった。……その意味でいえば、事実上、僕とおやじの別れは終っていた。数日前、やはり僕がおしめを届けに行つたとき、帰りぎわに、おふくろに教えられたおやじが、かすかに口をうごかして僕に「ありがとう。」といった時に。

家に着いてからも、風はあいかわらず吹きあれていた。空には、いやな色がひろがって、夕立がくるのかもしれない。おやじを寝かした座敷の掃き出し窓から、まいこんだ風が、おやじの顔にかけた白いものを、いまにも吹き飛ばそうとする。

誰かがいい出して、僕らは、おやじの枕元に、おやじの古い短剣を置いた。それは、中身がすっかり錆びついていると見えて、誰がどうやっても鞘から抜くことが出来なかった。

それは明治四十四年九月上旬の某日であつた。……

と、おやじは死ぬ何年か前に、クラス会でつくつた粗末なガリ版刷りの文集に、五十年昔の思い出をかいている。おやじが死んでから、僕はその本箱をかきまわして、十八歳のおやじに出くわした。